

キャアプテ~~~~ン・ウソップ!!!（笑）

「あつたなー！本当に大陸が！」

「なに言ってるの？ナミは優秀な航海士だよ？」

「はいはい。褒めてもお酒ぐらいしか買ってあげないわよ」

「ナミ……流石だな」

すかさずキリツと顔を作ってナミを讃える言葉をかけるゾロ、そんなに酒が飲みたいのか？

「タクミに買うのよ？欲しければわたしを讃え敬いつつ、タクミに配給を願いなさい」

芝居がかった調子でそう告げるナミはノリノリだった。

「タクミ……何か扱いが違くねエか？」

「仕方ないんじゃない？この舟では今、俺が代理コックみたいなもんだから。海の上でコックに逆らったらデスるかもよ？求めよ！されど渡さん！！・・・みたいな（笑）」

「お前・・・性格悪くなってきたねエか？」

ゾロがジト目で睨んでくる

「親離れしたから？それよりナミがお酒買ってくれるみたいだし、久しぶりに昼間から呑まない？」

「・・・そうだなじゃあ行くか」

ゾロは納得していないようだが取り敢えず舟から降り、地面が久しぶりとかボヤキながら伸びをしている。性格は元から悪い方だと思う、昔は同僚から腹黒王子と呼ばれていた。褒め言葉として受け取った上で一発殴つていたのは言うまでも無い。後、ルフィに壊された酒樽のことで未だにいじけているのは否定はしない。

「あいつら何だ？」

ゾロの言葉で我に返ると崖の上にはウソップ海賊団の面々、俺、ウソップは結構好きなんだよね♪

「「「うわあああ見つかったア~~~~~」~~~~~つ！
！」「」

子供たちは一様に逃げだした。俺がゆつくりと舟から降りてくる間にウソップもこちらに下りてきて俺たち四人を見据えて口上を述べる。にしても鼻長いな~~~~~！！

Side ウソップ

やべえ、やべえ、やべえ、やべえ、やべえ、やべえ、やべえ、やべえ、
え、やべえ、やべえ、やべえ、やべえ、やべえ、やべえ、やべえ、
やべえ、やべえ、やべえ、やべえ、やべえ、やべえ、やべえ、やべえ、
え、やべえ、やべえ、やべえ、やべえ、やべえ、やべえ、やべえ、
やべえ、やべえ、.....やべえ！！！！！！

まじでやべえ、今、俺の前にはあの”懸賞金千五百万 道化のバギ”の一味のクルーが四人いる。小型船1隻に船員四人と聞いてやってきたが女はともかくこの男三人はやべえ！！！！なんかオーラみたいなのが視える気がするし、後から降りてきた銀髪はやけにニヤニヤしながら俺を見てるなんか特に鼻を見てる、いや凝視してる。

.....はっ！！まさかコイツ「新種発見！！！！鼻長族か？売ればいい値がつきそうだぜ！！」みたいなことを考えているんじゃない？マ

ズイ！！ここはやはり得意のハツタリで切り抜けるしかねエ！！！

「おれはこの村に君臨する大海賊団を率いるウソップ！！！人びうそでしょ」ゲッ！！ばれた！！」

「そんなことはどうでもいいから、わたし達は略奪しに来たんじゃないんだから。取り敢えず食事が出来るところに案内してくれるかしら？」

オレンジ髪の女が俺の嘘口上を途中で見破った！！！！この女もやはり警戒しておくべきだったのか。おのれ策士め！！！幸い村を襲いにきたわけでは無いようだし素直に案内でもするか。・・・待てよあの女即座に俺の嘘を見破ったって事は、俺の上に行く嘘吐きのプロ！！！嘘の伝道者で『唯一絶対究極嘘吐き神』に違いねエ！！！！

危うく騙されるところだった！よし、このまま森の中に設置してあるウソップ海賊団の究極の落とし穴に落としやろう

「なぐんだ！！それならそうと早く言えよ！よし俺がこの村1番の飯屋に案内してやるよ！！」

「はっはっはっはっは、おつまえ面白エなーーーー！！一人で何個の顔ができた？？」

麦わら帽子をかぶった男が俺が悩んでいる間の百面相に爆笑していた。この”ホコリのウソップ”としてはコケにされてムカつく限りだが甘んじて受け入れてやろう。振り返り、「ついてきな」と声をかけようとしたそのとき銀髪が不意に俺の鼻を掴んだ。

「やっぱ面白い鼻だね！鼻長族かい？」

やっぱいい〜〜〜〜〜〜！！！！俺は恐怖のあまり意識を手放した。

＼Side Out＼

「うわっ！！おいつ、大丈夫か！？」

「タクミ・・・ソイツ失禁してるぞ」

「はっはっはっはっは！！！！やっぱこいつ面白エーーーー！！」

「村1番の飯屋はどうなったのよ？」

.....ぎゅじゅてーじゅなっ
た。

キャアプテ~~~~ン・ウソップ!!!(笑)(後書き)

いかがですか、うちのウソップはハンパないネガツ鼻です。

感想・評価をお待ちしております！

ナニ早期救済を目指して（前書き）

原作読んで疑問に思ったことを解決させて貰います。

両方の評価に5をつけてくれた人が5人もいるみたいです。

なに？俺を泣かせたいの？できれば感想を書いて欲しいです。お礼を言いたいので。

「どうもありがと〜〜！！！」オカザイル面白かったです。

ナミ早期救済を目指して

復活したウソップに1番話を通じそうだったゾロから説明をさせ誤解は解けたっぽい？そんなウソップにつれられて（もちろんちゃん到着替えに帰らせました）やってきた村1番の飯屋でたたいま会食中ですよ。ナミはウソップからカヤさんの事とかいろいろ聞いてるみたいだけど俺はゾロと二人で地酒の飲み比べ。気に入った酒をナミにメリー号いっぱい買ってもらうつもりなんだよね。」

ちなみにルフィはどちらも興味が無いようで肉に夢中。まあ俺らの方に加わるうものなら問答無用で叩き出すが、せめてメリー号が関連するナミとウソップの会話には加わろうよ。

「タクミはシャンパンが好きなのか？でもそいつは樽では買えねエからあんまり量は積みねェんじゃねエか？」

黙って飲んでいたゾロに不意に話しかけられ素で応える

「いいんだよこれはここで呑むだけで、『シャンパン以外は呑みたくない』とか上客に言ってた新人時代を思い出すんだ」

「・・・何の新人だよ・・・ってそれは夜の店のことだよなア！？お前7歳からあの島に居たんだろ？しかもそれ以前の記憶は無いって・・・どういうことだ？」

「えっ！？・・・・・・」冗談だよ？」

ゾロはニヤニヤしながら追撃してくる

「今、一瞬慌ててただろ？白状しろよ」

「ジョ~~~~~ダンじゃな~~~~~いわよ~~~~~
う！~！！」

「オカマバー~~~~！！！！・・・流石にそれは冗談だろう。話したくねエなら別にいい。」

「ごめんねえ」

「・・・なんかもう普段の口調がオカマっぽく聞こえてきやがった。もうこの話題には触れねエことにする」

そう言っつてゾロは飲み比べを再開する。・・・いやあ危なかったあ流石に原作主要キャラに転生者をカミングアウトするわけにはいかないもんねえ。うまいこと誤魔化すことに成功したようだ。ありがとうベンサム！！

ていうかこっちにもあるんだ、ホストクラブとかオカマバーとか。ゾロがそんなの知ってたのも驚いたが、・・・酒好きだから？

そんな寸劇を終えて俺も飲み比べを再開していると

「おまえら・・・おれが船長^{キャプテン}になってやってもいいぜ！！！」

と話の流れは知らんがウソップが言ってきたので

「「「「めんなさい」「」「」

「はえエな　おい！！」

アイコンタクトも無く俺たちは華麗なユニゾンアタックをかました。

あの後、お野菜三人組とも寸劇をこなして、ルフィ、ゾロ、ナミの三人はカヤの屋敷へ直接交渉に向かった。

俺は何をしているかという原作で気になっていた事を思い出したので一人、別行動を取っている。気になる点はある”百計のクロ”

何の報いも受けていないことだ。ルフィは相手を殺さずに決着をつけるがそれは甘い！クロは戦闘後、ジャンゴの抜けたクロネコ海賊団に復帰し、海賊を続けている。これを何とかできないだろうか？

俺には策がある。しかもそれはナミの精神的早期救済になるのだ。俺は交渉のシュミレーションを終え、村の駐在所の電伝虫を手にする。

「・・・こちら海軍第16支部」

「はじめまして、俺は賞金稼ぎのタクミっていう者です。重要な話をお伝えしたいので、ネズミ大佐にお繋ぎ願えますか？大佐の出世に関わるお話だとお伝え下さい」

「なんだ貴様！？そんなふざけた電話を繋げるわけ無いだろう！！」

「あれ？いいんですか？大佐はその支部長でしょ？大佐の利益になることを伝えなかったら後でどうなっても知りませんよ？おそらく今日の電話対応者全員がまとめて処分されます。後日そちらに伺う予定もありますしね」

「・・・わ、わかった。くれぐれもわたしが最初に渋ったということとは大佐に話さないでくれ」

「了解しました」

よっしゃあ食いついた！第1段階クリアー！やっぱりね、この支部も腐ってる。東の海のダメ支部はシエルズタウンのモーガンがいな
い以上ここしか知らないから。断られたらどうしようか焦ったよ

「・・・わたしが第16支部大佐のネズミだ。有益な情報って
うのは本当だろうな？」

「もちろんですよ、大佐殿。大佐は”百計のクロ”をご存知ですか
？」

「無論知っている。我々海軍が捉え3年前に処刑した」

「聡明ですね、でもこれはご存じないでしょう・・・クロは生き
ています」

「！！！！何っ！？それは本当か？」

「確かな情報で潜伏先も突き止め、しかもわたしにはクロを倒す術
がある・・・大佐・・・海軍を欺き逃亡したクロを捕

らえたという手柄、欲しくはありませんか？大佐が別ルートで換金しても構いませんか？」

「・・・チチチチ・・・そういうことが、で、いくら欲しいのかね賞金稼ぎくん」

「話が早くて助かりますね・・・そうですね、当時の懸賞金が千六百万ベリー、海軍船全滅プラス海軍に対する偽装工作、さらに現クロネコ海賊団幹部ブチとシヤムをお付けして何とたったの一千万ベリー・・・いかかでしょうか？」

「チチチチ・・・破格だな。君は実に世渡りがうまい・・・いいだろうその話のろっじゃないか」

「ありがとうございます♪低価格設定なので、ついでに小さなお願いしてもよろしいですか？」

「言ってみたまえ」

「受け渡し場所はシロップ村、そこまで迎えに来ていただいた後、その場で賞金を受け取り海上レストラン『バラティエ』まで送っていただきたいんですけど」

「かまわんよ。そのかわり今後君が捕らえた賞金首はすべてわたしを仲介に通して換金してもらおう。それとクロは決して殺さずに無力化するんだ」

「了解しました。いつ頃こちらに到着しますか？」

「海軍船で全速3日といったところだろう」

「それなら大丈夫です。では3日後の夕刻シロップ村南の海岸で」

「楽しみにしてるよ賞金稼ぎくん・・・では」

ガチャ・・・

完璧だ（笑）大成功！！ネズミなら絶対乗ってくると思った。海軍船ならバラティエでのクリーク戦に合うだろ。賞金首になっていない今だからこそ使える悪魔的奇手！！ナミの一億ベリーは原作あと七百万ベリーって言ってたからどれだけ酒買っても一千万ベリー足せば足りるだろうね。アーロンは約束は守る、ナミはそう信じているからそれだけで救われるだろう。まあどっちにしろアーロンパークは潰すしね。アーロンがすんなりお金を受け取っても後から奪還します。

悪巧みもすんだことだし、あすの戦いに備えて呑み直しますか

ナニ早期救済を目指して（後書き）

タクミ真っ黒です。

ウソップの決意（前書き）

すみません。ここはあんまりいじりたくなかったんですが・・・

ウソップの決意

ゾロと飲み直そうと思ったんだけど見当たらないから南の海岸で一人酒の真っ最中です。

「タクミ！？アンタこんな所に居たの」

「あ、ナミ、買ってもらったお酒はこれがいーかな、10樽位買っておいてね」

「そんなに載るわけ無いでしょうが！」

「がつんっ！！殴らなくてもイイのに」

「痛いよ！！、お嬢様に船貰うんじゃなかったっけ？」

「今、そんな状況じゃないのよ！！」

「ん？？どうした？そういえば長鼻くんが元気ないみたいだけど」

ナミが深刻そうな顔で話し始める

「この村が明日襲われるのよ……クロネコ海賊団って海賊にね。この海岸から進攻してくるって情報を事前に掴めたのは幸いだっただけど問題は首謀者が村人からの信頼も厚いクラハドルっていう執事ってことなのよ」

「何か問題がある？上陸地点が解ってるんなら船寄せる前に殲滅すれば？その執事の事だって実際に計画を話してるのを見たし聞いたって言えば問題無いと思うけど？」

「殲滅ってそんな事……出来そうね、タクミなら。でも住人の避難は難しいわ」

「なんで？」

ウソップが絞り出すような声で語りだす

「……あの執事が話してるのを聞いたのはお前んとこの船長とおれなんだ。コイツはよそ者だから問題外だし、……おれは嘔吐きだからよ、信じて貰えずにこのザマだ」

銃創がある左腕を押さえながらウソップが俯いている

「腕に銃弾ブチ込まれようともよ・・・ホウキ持つて追っかけ回されようともよ・・・ここはおれの育った村だ！！おれはこの村が大好きだ！！みんなを守りたい・・・！！！！こんなわけわからねエうちに・・・みんなを殺されてたまるかよ！！！！」

涙を押さえ込んで立ち上がるウソップを俺は真っ直ぐに見据える

「だからおれはこの海岸で海賊どもを迎え撃ち！！この一件を嘘にする！！！！！！それが嘔吐きとして！！おれの通すべき筋つてもんだ！！！！！！！！」

やっぱウソップはキメるときはキメるねえ！かつこいいよ！でもまあ嘘は良くないね、戦闘時以外ではあんまり嘔吐かないほうがイイと思うよ。ちよっと自業自得な感じもするけどなかなかの心意気をみせて貰ったし、俺も助けましょうか。

「ルフィ？俺は助けてあげたいんだけど、どうする？上陸地点はここなんだろ？俺なら近づいた瞬間に船ごと殲滅できると思うし」

「ああ、でもおれ達も加勢「言つとくけど宝は全部わたしの物よ！」・・・するぞ」

＼Side ウソップ＼

こいつら馬鹿なのか？相手はクロネコ海賊団、C・クロの賞金は確か一千六百万ベリ！。俺は決死の覚悟で狡い手を（矛盾してない！）使うつもりだったのに、銀髪は無茶苦茶な殲滅計画を次々と発表し船長は面白くないからと却下しまくる。

こいつらには緊張感の欠片も無い結局おれ一人で戦うようなもんだ。決戦を想像し足が震える。毬藻頭がこつちを黙ってみてやる。

「見世物じゃねエぞ！！怖エもんは怖エんだ！！ふざけた計画立てて馬鹿にしてんなら帰れ！」

「笑ってやしねエだろ？立派だと思うからおれは手を貸すんだ！だいたいタクミの計画はおそらく全部実現可能な計画だと思うぞ？」

はい？？？銀髪の計画って遠距離から大岩ブン投げるとか、船まで跳んでいって単純に蹂躪するとか聞いて損したって言うような計画ばかりだぞ？それが実現可能？一体何なんだこいつら？

＼Side Out＼

どうせ反対側の海岸に上陸すると知ってる俺はふざけた事ばかり提案して遊んでいたらウソップが全員に何が出来るかを聞いてきたので答える

「斬る」「のびる」「狩る」「盗む」「隠れる」

そんなコントをしながら結局おれの遊撃作とウソップの狡い作戦（油坂）の２段構えになった。夜明けと共に攻め入ってくる予定のクロネコ海賊団対策は意味無く完璧！いつまでも船が見えないので流石にみんな不審がってるけどもう北の海岸付近に上陸してるころだろう。一味での初戦闘を前に血が滾ってきた

「なんか北から声が聞こえないか？」

みんなに聞こえそうな音になったあたりでウソップの様子を見ると……立ったまま泡を吹いていた……

……だからどうしてこうなった

ウソップの決意（後書き）

次回はウソップサイドからVSクロネコ海賊団が開戦します。

V S クロネコ海賊団（前書き）

ルフィが空気ですね。

V S クロネコ海賊団

Side ウソップ

自信満々で待ち構えるこいつらにどっか安心していた部分があったのかもしれないエ。船が見えたら銀髪が跳んでって（飛ぶ では無いらしい）上陸前に片付けるそうだ。瞬殺出来ないような敵が乗っていた場合は即帰還、五人で迎え撃つらしい。

跳んでいく！？この点には銀髪の仲間三人も若干驚いてはいたが「タクミは何でもありね！」とのオレンジ髪の意見でなんか納得していた。この銀髪の実力を早くこの眼で見えてみてエな！そんなことを考えていると朝日が見えてきた。

・・・・・・・・あれ?????

完全な夜明けがきたってエのにクロネコ海賊団の姿は欠片も見あたらねエ！？四人とも不審な顔をしているが銀髪の様子がおかしい。長い髪がざわざわと総毛立ちそれを注視しているといつの間にか顔

が獅子になり肢体も獣のそれに変貌を遂げていた。

「なんか北から声が聞こえないか？」

銀髪の獅子の唸るような言葉を聞きながらおれの意識は途切れたんだ。

＼Side Out＼

泡吹いてるウソップを起こそうとして手を伸ばしたらいつの間にか人獣化してた。そりゃあウソップも泡吹くわな（笑）俺は一人納得し、寧ろ話していたはいたが初見で眉ひとつ動かさないゾロに驚いたね。俺のことを仲間だと思ってくれるからだろう！うれしかった！！

人獣形態での初めての対人戦闘に興奮してたんだろうけど未だに制御が完璧に出来ていないとは情けない・・・はっ！？それより早くウソップ起こさないと！！

＼Side ウソップ＼

「よし、じゃあ俺はウソップ連れて先に行くから、ナミはこの迷子顔の二人を連れて来てくれ」

「誰が迷子顔だこらア!!!」

タクミは俺を小脇に抱えてそんなことをたまった

「は？おいっ！？なんだ？自分で走るぞ！俺は脚には自信があるんだ——————!!!」

なんだこれ！？景色が見えねエくれえのスピードで流れていきやがる!!!っ！・・・身体が潰れそうだ!!!!!!なんか話しかけてきてるみてエだけど聞こえやしねエってのああ——————!!!

「急に止まるなクラア!!!!死ぬかと思ったわあ——————!!!」

「つつても、もう着いたぞ？北の海岸」

は？そこには俺同様に口をぽかんと開ける海賊たちが大勢いた。

Side 4

「誰が迷子顔だこらア!!!」

「は？おいっ！？なんだ？自分で走るぞ！俺は脚には自信があるんだ――！！！」

タクミの発言にゾロが憤慨し、ウソップが抗議をしてる途中でタクミはウソップを抱えて風のように消えてしまった。あいかわらずとんでもないスピードね！わたしたちも早く行かなきゃね、北の海岸にはわたしのお宝があるんだから！！！！

「北へ真つ直ぐ――！！！」

「ちよつと待つてルフィ！！そつちは東よー！！・・・ダメだわ早く追いかけな・・・きゃああ「おいナミ！！何やってんだ」助けて落ちるっ！！」

ウソップが撒いていた油に足をとられて滑り落ちそう、でも大丈夫
ゾロの服に手が届いたから

「は！？」

つるん！……べちゃ！！ キラッ

「うわあああつ！！手エ離せバカ！！」「ありがとゾロ！！」「

だん！」「う」 だん！」「が」 だん！！」「がつ！！」「

わたしは犠牲となったゾロに感謝を込めてその背中を三段跳びで駆け上がった！

「のわあ………」

ゾロはまぬけな叫びをあげながらツルツルと油坂を滑り落ちていった

「わるいつ！宝が危ないの！！」

わたしはルフィを連れ戻すのを諦めて全速力で北の海岸へと向かう。

Side Out

さて北の海岸に着いた今、目の前には呆然とした表情で固まっているクロネコ海賊団の面々、まあ自分たちの進む道の先に突然ライオン人間と長鼻族なんかが現れたら驚くわなあ。ま、動かないならちようどいいしさくつと潰させてもらおうかクロネコ海賊団！！

Side ウソップ

「俺はあの船長を潰すから、ルフィとゾロが来るまで他の連中の足止めをよろしく頼む！！」

未だに固まっていたおれにそう告げるとタクミはさらに巨大化して駆け出していった。先ほどよりスピードは落ちるようだがあれがタクミの全力の姿なのだろう飛び道具使いの船長の下へ真っ直ぐに本当にまっすぐに進んでいく。進路を阻む者を紙屑のように屠っていく。

おれはその姿に震えていたこれは恐怖じゃなくてたぶん憧れ、これが海賊！！”勇敢なる海の戦士”おれはたぶんあんなに強くはなれないけどそれでもおれは海に出よう！早いほうがいいこの戦いが終わったらすぐにでも！！

そんなことばかり考えていたらおれの頭を味わったことの無いような衝撃が襲った！！？そうだタクミは敵をすべて倒しながら進んだ

わけじゃないんだおれの力を信じてこの坂道での敵の足止めを任せ
てくれたんだ。それえなのにおれは・・・

「！！！！」

声も出ねエ・・・でも、もう情けなく気絶なんかしないおれの心
はもう”勇敢なる海の戦士”なんだ！！気力だけで身体を動かして
こっそりとパチンコに手をかける

「おい！お前ら早くいくぞ！！あの化け物には船長がニャーバン・
ブラザース
兄弟しか勝てない！！俺達はC・クロの計画を狂わせないことだけ
考えてりゃいいんだ！！計画が狂ったらそれこそ殺されつつがあ
は！！？」

「へっ！！この坂道・・・たとえ死んでもお前らを通すわけにはい
かねエ！！！！おれはいつも通り嘘を吐いただけだから！！！！・・・
村ではいつも通りの1日が始まるだけなんだから！！！！」

おれはゆっくりと立ち上がる、さあこい！！キャプテン・ウソップ
様の本領はここからだぜ！！！！

「トラっ！！大丈夫かっ！？このクソガキふざけやがって！死ねエ
！！！！」

今度はカトラス良く手入れされてやがる・・・ははっ、2発目の

発射準備は整ってるんだ狙いは外さない！！気力雄雄しくおれは雄たけびを上げる

「うおおおおお！！！！！！」

・・・っ！！！？立ちくらみ！？・・・やべえ、滑り落ちていくおれのパチンコ、まっすぐに迫ってくるカトラスの突き。

おれの世界はスローモーションだった。。。

V Sクロネコ海賊団（後書き）

視点が変わりすぎて読みにくいですね。しかも長い。反省してます。
ウソップをかつこよく書きたかったんです。

シュレーディングーのクロネコたち（前書き）

初めて感想をもらえたのですが酷評でした。

・「ルフィのキャラが変」そうですよね。迷走してる自覚があります。かつこいい台詞を考えてはみるのですがルフィはとくに原作の台詞が強すぎて丸写しになりかねないので、結果ネタキャラ（ていうか空気キャラ）になってますね。何とかしたいと思ってます。

・「主人公の喋り方が気持ち悪い」この意見があまりに多かったので全改稿しました。

感想・評価お待ちしております。

シュレーディングアのクロネコたち

俺は坂道の防衛をウソップに任せ、俺は人獣時に常時展開の「紙絵武身」を解除して坂道を駆け下る。ナミと二人である程度持ちこたえてたんだから俺が数を減らせばまあ大丈夫だろ。

ジャンゴを捕捉して正面突破を試みる。森の番人をしていた頃は獣形態で脅しをかけ引かない場合はそのまま噛み殺していた。だから人獣形態での戦闘は今回が初、「紙絵武身」の性能と一番不安な「紙絵」そのものはクロで試せばいいだろう。それぐらいの相手じゃないとテストにならない。

先頭の男は単独で武器はサーベルなので不安だった「鉄塊」を試してみる

「鉄塊 剛」

キン！

「なっ！？髪で受け止め「咬指銃」グボア！？」

余計なことを言わないで欲しいねえ、身体で受け止めるのは怖いもんは怖い。まあこれでこの船の雑魚クラスは「鬣 鉄塊 剛」で受けきれることがわかったし・・・「獅子鉄塊」とかいったほうが様になるだろうか？

「咬指銃」が人に与えるダメージも大体わかった。うん、やりすぎた「指銃」は指に「鉄塊」をかけて高速で打ち抜く技（原作の理論

がどうかは知らないけど)「咬指銃」は5本の指すべての第1関節までに「鉄塊」をかけて打ち込み後は鍛えた握力で力任せに肉を掴み取り取る。アーロンを真似て修行した技。本家とどちらが強いのだろう?結果タマ(仮)のお腹は左から1/3ほどが無くなり鮮血が噴出すってゆうか溢れてる、致命傷だね、綺麗だね、何か叫んでるような気もするけどスルーで!

タマ(仮)君の犠牲はもちろん忘れるけど俺の力の礎になるんだ、そうコイツらは哀れなシュレーディングアのクロネコ。後は原作の「六式」応用技を試すことにするからまあがんばって。

「なっ何なんだお前は・・・ワン・ツー・ジャンぐおぼべば!!!」

「あれ?」

うん、またやりすぎた、珍しく反省はしてる。ダメだ「紙絵武身」を解除しての人獣形態は血を見て湧き上がる凶暴性を抑えきれない。ジャンゴに催眠術をかけられそうになってとっさに「獣蔵」かますまで気づかなかった。

チョッパーになんとか出来るのか?まあそれまでは単独戦闘時に限定して使用することにするか、何かもう見境無いからな・・・いろいろ試すつもりだったのに接触する前に「嵐脚線」で無力化、進路外から近づいてきた相手には「咬指銃」、クロネコ海賊団にはジャンゴ以外に飛び道具の使い手がないようなのでジャンゴだけを見据えて只進んできたわけだが。

被害は甚大・・・たぶん4人くらいは死んでる。すっ飛んでいったけどジャンゴ死んでないよな？まだ原作に関わってきそうだからネズミに引き渡す約束もしなかったし、もちろん殺すつもりも無かった。でもジャンゴは実際怖いだろ？「ワン・ツー・ジャンゴで死にたくなれ」と言われたら即終了。あの催眠術はそれぐらいの強制力がありそうだからな。・・・たぶん生きてるだろ！！なっ！！だってこの世界の人間ってヤツはやたらと打撃には強い！吹っ飛んでもなぜか無事！ワポルとかバギーとかよく生きてたなと感心するよ。よし、ジャンゴは大丈夫のはず。次っ！！

敵を殺しちゃったのは大丈夫かな？なんだかんだで一味は直接殺してないよな？でも、戦いにはみんな覚悟を持って臨んでいるみたいだし、無力化した相手に止めを刺さないと言うだけ・・・まあ大丈夫だろ、みんな1撃で死んでるし。いたぶる様な快樂殺人者には見えないはず。頭に「咬指銃」を受けた船員はかなり酷いことになってるけどスルーで、何かもういろいろスルーで！！もしも何か突っ込まれそうだったらそれっぽい演説でもかまして、うやむやにしておしまおう。

「うおおおおお！！！！！」

おっ！勇ましいなウソップ、何人倒したんだ？

・・・・・・

「！！？目に映るのは絶体絶命のウソップ！！慌てて地面を強く蹴る！」「紙絵武身」にはタイムラグがあるので解除したまま駆け出す

「「剃」！！！」

頼む！！間に合ってくれ！！！！

くSide ナミく

「わたしの宝に手えだしたらゆるさないんだから！！」

北の海岸に向かって森を駆け抜ける。タクミが先行しているので問題無いとは思いつけどあれはココヤシ村を救う為の大切なモノ。何があっても渡すわけにはいかない。もうすぐ海岸だ万が一に備えて武器を用意していこう・・・無事なんでしょうねタクミ・・・

「うおおおおお！！！！！」

森を抜けて最初に聞いたのはウソップの雄たけび。てっきりタクミに任せて自分は観戦モードにでも入っているのだろうと想定してた

のにやるじゃない・・・ウソップに後ろから駆け寄る、！！？武器のパチンコを取り落としカトラスを持った敵が眼前に迫っているのにウソップは動かない、いや動けないんだろう後頭部からの激しい出血がその傷の深さをものがたっている。しょうがないわねえ助けてあげますか。

わたしは走ってきた勢いそのままにウソップの左後ろから飛び出し、右肩の上まで振り上げていた組立式の棍を、ウソップの鼻に触れる寸前だったカトラスを持つその手に振り下ろした。

べきやつ！！「！！？」・・・カラアン

手首が碎ける確かな感触！！敵はたまらずカトラスを手放す。自分の両手に残る感触に不愉快な気持ちになるが、そうも言っていない。インパクトの瞬間に絞っていた手を緩め棍を縦に担ぎ直し、一歩で相手と距離を詰める。肩から相手の懐に潜り込んで一本背負いの要領で棍を振るう。

ズガッ！！！！「でえふっ！！！！」・・・バタツ・・・

ナミの肩を支点に顎へと放たれたその一撃は容易に敵の意識を刈り取った。

ウソップに一発受けたのであろう足元で悶絶している敵の水月をついでとばかりにヒールで踏み抜く。あまりに流麗に行われた一連の動作を前に周りにいた四人の船員たちとウソップは息を呑む。

「ふう、・・・戦うのは好きじゃないのよね、引いてくれない？」

「何だこの女!!?メチャクチャ強えぞ!!!!」

「三人がかりで行け!!!!」

「ふざけんなお前が行けよ!!!!」

「……ドキヤ! バキ!! メコッ!!!! ズドンッッ!!!!!!」
「「「ギャー——っ!!!!!!」」」

「話を聞かない相手は嫌いだわ!!!!」

「『どん!!』って感じだな!」

ウソップがわけが解らない感想をいつてくる

「何よそれ???」

「まあ気にすんな！！にしてもお前こんなに強かったんだな！！」

「あいつらに比べたら普通よ」

「・・・なるほど（笑）比較対象が規格外だもんなあ」

「そんなことよりアンタ大丈夫なの？？間欠泉みたいに血が噴出してるわよ？」

ウソップの頭はリアルにそんな感じだったので本気で心配した。

「大丈夫だ！！おれはこの坂を頼むとタクミにまかされたんだから、せめてあいつらが来るまではここにたち続ける！！！」

「なあにかっこつけてんのよ！！・・・まあいいわ、ほら、肩貸してあげるから」

「・・・悪いな、ほんと結構イッパイいっぱいなんだよ・・・」

ちよっただけ間があったけど割りと素直にしたがってわたしの肩に

身体を預ける。ほんの3分ほど離れていただけなのにウソップは変わっていた。わたしはちょっとだけその姿がカッコイイと思った。

Side Out

シュレーディングアのクロネコたち（後書き）

うちのナミさん戦えます。まあこれぐらいは出来ないと海賊専門の泥棒なんて無理なんじゃないかなあと思って書きました。

くSide。。。ってやってんの普通に地の文で三人称がでます。ごめんなさい。直りません。文章を書くのは難しいですね。

殺される覚悟（前書き）

前半と後半でノリが違いすぎる。カオスだ・・・

殺される覚悟

だめだ！！届かない・・・俺なんかが原作に介入したせいで主要キヤラクターが死ぬ。そう思ったときウソップの背後からナミが跳び出して来た。

ナミは華麗な棍術で敵を圧倒！！このレベルなら問題無いだろう。

「月歩」で崖の上に行き様子を伺うことにするか。重たい身体に苦勞しながら崖の上に到着。

「どれどれ・・・なあっ！！？」

ナミ強いな！想像以上だ、一人ひとりを一撃で的確に気絶させるなんて！！でも、最後の一人を柄の部分で突いたときズドンツツ！！！！という音はちよつと・・・ズドンツツ！！！！って・・・・あの船員死んだんじゃないか？

ナミの扱ってる武器はよくみると柄の部分が若干太くなっているタイプようだ、力がなくてもアレならうまく使えば相手を昏倒させられるし、捌きやすい。原作では只の棒じゃなかったか？

負傷したウソップに肩なんか貸してるし男前だな！！それじゃあ「紙絵武身」で二人と合流するか！！

—————スタツ！！！！

「驚いたよ！！ナミ強かったんだな、ウソップも勇ましく戦ったみ

たいたしやるじゃないか。それはそうとアタマだいじょうぶか？」

「タクミ無事だったのね♪・・・まあ、当然か」

「ていうかさっきのアレは何だア！お前メチャクチャだよ！！！！みとれて不意打ちくらったじゃねエか！！あと「アタマ大丈夫？」って言うな！！！！なんか馬鹿にされてる気がしたぞ！」

「それだけ元気にツツこめるなら大丈夫だ、どうだ？うちの一味にツツこみ担当で入らないか？ルフィに推薦しとくぞ！」

「ふっ！！ツツこみ兼船長^{キャプテン}つてことだろう？まあ、入ってやってもいいぜ！！！！・・・つてあほかア！！！！どこの世界にツツこみの腕を買われて船に乗る海賊がいるんだよ！！！！！」

「おお！！ノリツツこみも出来るんだな！！ハイスペックでお買い得だな！！！」

「ええええ、ついでにパチンコが得意で狙撃手も兼任、手先も器用。こちらのウソップが今なら何と19800ベリー・・・つてさすな！！！！！」

「やっぱウソップおもしろいねえ♪」

「ウソップ、もう止めときなさいきつとタクミは際限なくボケ倒すつもりだから、そんなテンションで突っ込み続けたら出血多量で死ぬわよ。・・・あなた死ぬわよ！！！！」

「ぎゃ~~~~~~~~！！！！！！俺は死ぬのかア~~~~~」

一見心配しているようでその実ナミまでからかい始めた。・・・
哀れウソップ（笑）

「ナミ！！！！てめェ！！！！よくも俺を足蹴にしやがったな！！！！」

「タクミ！！！！ウソップ！！！！北ってどっちかちゃんと言っとけえ！！！！」

やっぱリゾロはナミの足場にされたのか、ルフィはもしかしたらナミと一緒にくるかもって期待してたんだけどやっぱルフィもファンタジスタだったか。

「遅かったな、二人でどっか遊びにでも行ってたのか？ナミと一緒に来るように言ったと思うんだが？」

「そいつがおれをお「まあいいじゃない、わたしたち三人でほぼ壊滅させちゃってるし」・・・おい聞けエ！！て「タクミ、状況を説明してあげたら？」・・・もういい」

「・・・・・・・・・・」

ゾロはナミに被せられて諦めたみたいだけど、ルフィが言い訳しないねえ、明確な指示が出てたのに暴走した自覚があるのか？まあいい。

「じゃあ説明する、二人が来るまでの間に俺が船長に特攻をかけて成功、船長はどっかに飛んでいってクルーも10人くらいは無力化した。その間の坂道の死守をウソップに任せてウソップが負傷、ナミが助太刀にはいつて6人・・・正確には5人か、1人はウソップがほぼ追い詰めてたしまあとにかく6人無力化に成功で今に至るってわけだ敵残存勢力は大体船の前でほうけてる10人くらいだな」

「無力化って頭が無くなってんのはありや何があつたんだ？」

「死角から攻撃されたから掴める所を全力で掴んだらああった。まあもとから加減はしていないが」

「以外だな無闇に生態系を荒らすなっっていつもいつてるから殺さねエように闘うタイプだと思ってたぜ」

ここだ！！ここでそれっぽい説教をかませばゾロの前で今後の実験に加減はいらないはず。

「???可笑しなこというんだな??俺は海賊はみんな「殺される覚悟」のあるヤツ等だと思ってたんだが違うのか?俺は命をかけて叶えたい夢があるからこの船に乗ったんだ。だからどこで死ぬことになっても構わない、まあ全力で抗いはするけどな。海賊はみんな理由は違えど信念を持って船にのってる。そんな相手に加減するのは失礼だと思う、だから俺は戦うのなら全力で戦うことに躊躇なんかしない。それが「殺す覚悟だ」自分のために、そして仲間のためにな」

「・・・・そうか」

あれ?何かルフィ達も一緒に聴いてたみたいだ手間が省けて助かった。皆がこちらに視線を向けてくるので取り敢えず微笑んでおく。ていうか敵さんも?何か呆けてた顔に喝が入ったみたいだけど・・・

あれ?

殺される覚悟（後書き）

主人公の後半の長セリフはどうかで聴いたような言葉を繋げただけです。ワンピで読んだのかな？書いてるシーンのあたりを手元に広げて書いているので物語の先で出てくるセリフが出るときがあります。ご了承ください。

稀に意図的に書いてる場合もあります。

感想・評価をお待ちしています。

殺す覚悟（前書き）

初のルフィサイドオンリーです。

殺す覚悟

Side ルフィ

北がどつちなのか解んねエから適当に走ってたら目的地に着いたみてエだ。ほぼ同時にきたゾロと一緒に文句を言う。ゾロはナミのせいで遅れたらしい。遅れてきた理由をタクミに聞かれてゾロはくっつかかっている。たぶんタクミはおれ達二人のことをバカにしてみたいだ。タクミの言うことは遠回しな言い方が多かったり、よく解んねエたと言話をするからあんまり会話が續かねエ。

タクミはたぶんナミと一番仲がいい。舟の上ではよく二人で話しているのを見かけるし、釣りしてるときにおれが話しかけても釣竿の一部になった見てエに動かねエし適当な返事したり無視したり、終いには「集中させてくれ」とか言いながら半獣になって威嚇してくる、でもナミが話しかけたらちゃんと会話をし、釣りを止めて話して夢中になったりする事もある。タクミはおれの飯を釣ってくれてんの。

昼寝ばかりしてて口数の少ないゾロも起きてる間はタクミと楽しそうに話してることが多い。そういう時はだいたい二人は酒を飲んでいることが多い。ここでもナミはタクミと一緒にいる。酒を飲んでるときタクミは難しいことはあまり言わないで珍獣のおっさんや島の動物達の話、それと好きな酒の話をしてることが多い。

だからおれはあの日タクミが酒とつまみの話をしてるタイミングを

見計らって「そんなにうめエんならおれも飲んでみてエな!!!」
と言ってみた。酒の話におれが入ってきたのが以外だったのか少し
驚いた顔をしてなんか考え込んでたみてえだ。これで話せる話題が
増えると思ってただけど「ルフィはお酒飲まないほうがいいんじ
やないか？」と言われた。

納得できねエから文句を言ってやっただけど「実は俺は占いも出
来てな、ルフィには酒乱の相が出るから、お酒飲んだらダメだ」
だと、・・・・馬鹿にされてるんだと始めて自分でわかった思っ
た。いくらなんでも騙されねエ!!! 占いには虫眼鏡がいるんだ、
常識だ!!!

だからおれは夜中にこっそり飲んでタクミの嘘っぱちを証明してや
ろうと思っただんだ・・・・けど、2杯くらい飲んだあたりから記憶
がねエ・・・・おれは酒を飲んで暴れたらしい、酒乱ってヤツだ。
タクミが真っ先に気づいて止めてくれたらしい。

頭の中がぐちゃぐちゃだったけど占いのことをゾロに聞いてみると「
はっはっはっ!!! タクミなら何でも出来そうだな、それより虫眼
鏡使っつのは手相占いじゃねえのか？」と言われた。常識だそうだ。

タクミに悪いことをしてしまったと思って謝ったら赦してくれたん
だけど酒が無いタクミは釣りに集中するようになってあんまり喋ん
なかった。ナミとも喋ってないからタクミは本当に元気が無いんだ
ろう。おれにとっての肉みたいなもんなんだと思う。

この村について飯屋で酒を飲むとタクミは元気になってゾロと二人
で喋っていた。元気になってよかった。これでタクミが酒が本当に
好きだったことと、占いが出来るってことが解った。短い付き合
いだけとおれはタクミの事を信頼してるんだ。

・・・・・・・・でも

やっぱりおれはタクミの事をよく知らねエんだ。

何なんだこの状況はそこらじゅうに血が飛び散り頭や腹がねエ死体が転がってる。

本当にタクミがこんなことをしたのか？押し黙っているおれと、ナミとの言い合いが終わったゾロにタクミが状況を説明する。近くで気絶している6人はナミとウソップが坂から舟にかけて倒れているのは全部タクミがやったらしい。信じられないおれは「殺す」って言葉は使っけど本当に相手を殺そうと思ってとどめを刺したことは無エ。

戸惑っているとゾロがタクミに質問をした。何があったのかと、タクミは加減をしていないからだと答えた

おれと違ってタクミは本気で闘うだけで相手を殺してしまうことがあるんだ。そんな力を持ったらおれは闘えるのかわかんねエ。

タクミは相手を殺さないと思っていたとゾロが言った。ゾロは冷静みてえだ。賞金稼ぎをやっていたから見慣れているのかもしれない

でもタクミは？・・・おれはタクミの事をよく知らねエ。

「???可笑しいこというんだな??.」

タクミは答えてくれた「殺される覚悟」海賊はみんなそれを持つて
るって言った。おれも死ぬ覚悟はある。夢のために戦って死ぬなら
別にいいと思っている。戦って死ぬそれは殺されるって事だ。海賊
はみんな命をかけたそれぞれの殺される覚悟がある。そんな相手に
手を抜くのは失礼だと言った。「殺す覚悟」も持たないといけない
と、だからタクミは迷わない、だからタクミは強いんだ。

おれはタクミのことがちょっとだけ解った。そして最後の一言で1
番大事なことがわかった。

「・・・・・・そして仲間のためにな」

そうだ、はじめてあつた時からタクミは守る為に戦っていたじゃな
いか。そんなタクミがおれを信じて仲間になってくれたんだ。

今日だってタクミは仲間を守る為に戦ってくれたんだ!!!!!!

「・・・・・・そうか」

ようやくタクミの1番大事な気持ちがわかってタクミに目を向ける。

その時のタクミのはおれにとっても優しい目を向けた、とてもじゃないけどこんな戦場で見せる顔じゃなかった。

・・・そうだ！！みんなに飯を作ってくれたあと最後まで喰ってるおれにあんな顔して聞いてくるんだ「うまいか？」って！！！！

俺はタクミのことがいろいろ解った気がする。

＼Side Out＼

殺す覚悟（後書き）

温度差が酷い。

コタツ布団をたなびかせ（前書き）

10万PV達成です！！ありがとうございます！！

コタツ布団をたなびかせ

Side ゾロ

おれは迷ってる。おれらしくねエな．．．

タクミの言葉が焼きついてる。「殺される覚悟」、「殺す覚悟」．．

言いたいことはわかったんだ。己が信念の為、仲間の為、信念ある敵の為、命を軽んじることなく全力で生きろとタクミは言ったんだ。

おれも共感できる、そのように生きてきたつもりだった。けど．．．

おれは賞金稼ぎを名乗ったつもりは1度もねエが「海賊狩りのゾロ」と呼ばれてる。生きる為に賞金首を狩ってきた。おれは大剣豪になる、くいなどの約束だ。その為に生きてきたんだ。

ただどおれは碌に航海もできないまま海を流離う賞金稼ぎでしかなかった。始めのうちは賞金首を殺しちしまうこともあったが政府は公開処刑を望んでやがる、殺してしまえば賞金額が半分になっちゃうんで、手加減して殺さないようになった。おれに狙われ逃げ出そうとしたような覚悟のねエヤツらはどうでもいいが、全力を持つ

て向かってくる相手にもおれは手加減をした。

賞金稼ぎとしてなら合格だろう。捕らえること、それが目的なのだから、おれが目指す高みは大剣豪だ！！戦いに全力を出さないようなやつがそこへ行けるのか？

これからおれは全力で戦おう。殺すことが目的では無い、ただ全力で戦う。大剣豪の名を手に入れるそのときまで。

S i d e o u t

ルフィとゾロは坂の中腹に並びクロネコ海賊団の連中と対峙する。
何か俺の演説を深く受け止めてくれたみたいで両者ともに覚悟を宿した眼つきにみえた。

まあ敵さんの何人かは逆にびびったみたいで船に引き返していった。それでいいんだウソップがこの戦闘をなかったことにすると言った以上クロネコ海賊団の船がここに残るわけにはいかない元気な船員も何人が残ったほうがいいだろう。

「ここから先はおれ達に任せてくれねエか？」

「別にいいけど危なくなったら助けに入るからな」

「相手が剣士じゃなかったらにしてくれ、これはおれの野望だ!!」

「ふっ・・・聞きそうにもないな。がんばれよ船の中にそここのヤツが2人いるみたいだから気をつけろよ?」

「それも占いか!？」

「これはハンターの勘だよ、ルフィ」

「にしっ!!そっか!!!!」

何かルフィ楽しそうだな。いいことでもあったのか? 途端にクロネ
コ海賊団の船員がざわつく船を見るとどうやらニャーバン・兄弟が
現れたようだ。船員たちの歓声をつけて船から飛び降りる。

スタタッ!!

「おいっ!!!!なんだこりゃ!!?」

「ジャンゴ船長もやられちゃったってのはマジみてえだな」

どうやら先ほどの船に向かった船員は2人を呼びに行っていたようだ。身のこなしから俺が話したそこそこのヤツだと判断したのだから二人が身構える。

「・・・ルフィ」

「ああ・・・お前らア！！！！お前らの相手はおれ達だ！！！！覚悟があるなら前に出るオ！！！！」

「猫かぶってる場合じゃなさそうだなシャム！！！！」

「ああ全力で行くぞブチ！！」

「おおともよ」

背中を丸めてわざと隙を作っているシャム、コタツ布団をたなびかせて並走するブチ、2人がこちらに駆けてくる、爪を武器にする相手ということでゾロが一步前に出た。その時、不意に2人の足が止まり、何かに脅え震えだした。先程まで覚悟を決めた目をしていたほかの船員たちも皆が震えている。

船員の1人が何事かをつぶやきがくりと膝をつく。その視線の先には手首の内側で丸眼鏡を上げるクラハドルこと海賊”百計のクロ”・・・

「もう とつくに夜は明けきってるのに・・・なかなか計画が進まねエと思つたら・・・何だ このザマはア!!!!!!」

お嬢様を待つ必要は無いだろう彼女にはメリーの言葉で十分に真実は伝わっている。クロの口から辛い言葉を聞かされる必要もないだろう。

舞台は整った。役者は海賊、観客はいない。それでも舞台の幕は開く。

コタツ布団をたなびかせ（後書き）

浅いですね。

本戦開幕（前書き）

生命帰還で爪って伸ばせますかね？

元ネタはキルアなんですけど

本戦開幕

Side クロ

おれはこの眼を疑った何だこの状況は！！？船員の半数以上は倒れ伏し、ジャンゴのヤツまでいなくなつてやがる。おれの計画が狂う？馬鹿な！！！！3年、3年だぞ！？おれの最後の計画だ！！！！

こんな餓鬼どもにじゃまされたつていうのか！？・・・何だあの銀髪は、髪は鬘のようにみえるしあの顔はとても人間には見えん。．．．
．．．そうか悪魔の実！！なるほど、こいつらじゃ手に負えないわけだ。くそつ！！失敗の可能性なんて考えてもいなかったからメリーのやつを殺してしまった。．．．もう後戻りはできない。いや？屋敷の使用人や村の住人の命を盾にすればあの夢見るお嬢様は自ら遺書を書き死んでくれるかもしれない。

当初の計画とはだいぶ異なるが仕方ないだろう。結果は変わらない。

そうと決まればこいつらに用はない、いや？脅しをかけて餓鬼どもの始末をさせてみるか。成功しようが失敗しようがおれのマイナスにはならない。どうせ皆殺しにするのだから。．．．．．

Side Out

「貴様、悪魔の実の能力者か？」

さすがクロ。一発で見抜いたか！！

「教えてやる義理はないがいいだろう。おれはライオンの力を手に入れた能力者だ！」

クロネコ海賊団の船員がどよめく中クロは”猫の手”をはめ、無音の超高速でシャムとブチの後ろに回りこみにその刃を突きつける。

「……おいお前ら、……5分やろう、その餓鬼どもを消せ！
！それが出来ないのならお前ら皆殺しだ……その銀髪はおれがやる」

あれが”抜き足”かスピードは俺の「紙絵武身」での「剃」と大差ないな。誰に師事したわけでもないだろうにあの速度に加えて無音の移動術。化け物だな。クリークなんかよりよっぽど強そうだ。”疾さは強さ”とは誰の言葉だったろうか？

シャムとブチは抜き足を前にして逆らうことは無謀と察したのか素直に命令に従う

「よつよし！！5分あれば何とかなる！！あいつらたいして強そうじゃねエ！！5秒で片つけるぞ、ブチ！！」

「よしきたシャム！！」

2人はルフィとゾロに対じする、さあ俺もクロで「剃」の実験でもしますか・・・想像以上に速いから「紙絵」の実験はまた今度にしよう・・・びびってる訳ではない・・・

俺はナミとウソップにお嬢様とお野菜三人組がくるかもしれないことを伝え、この光景を見なくて済むように坂の上で待機しておくように伝える。クロと打ち合う為に「生命帰還」で爪を伸ばして強化すると皆を巻き込まないように海岸へと駆け出した

Side ゾロ

「ネコ柳大行進！！！！」

暫くの睨み合いの後、2人がかりでの猛攻！ルフィは爪を防ぐ術が無いから高く跳び上がる。初撃は武器の性質を見極める為、見に入ったがどうやら愚作だったみてエだな。一撃でしとめてエが連撃を捌きながらの攻撃は得策ではないじゃねエ。

一度距離をとろうかと考えていると、空中から伸びてきた腕が細身の男を拘束した

「お前の相手はおれだア！！！」

伸びた腕を縮め、地面に降り立ち、今度は森の方に大きく首を伸ばすルフィ

「ゴムゴムの……………」

コタツの男はそれに一瞬気を取られる

好期と見ておれは大きく1歩後退し距離をとる。

コタツ（もうこの際そう呼ぼう）は距離を取ったおれの方ではなく、意図を察知したのか伸びきったルフィの首を狙いにいきやがった。

逃がさねエ！！！！

「虎……」

おれは十分に刀気を練り上げ得意の大技を構える。ルフィの首にコタツの爪が届こうかというその瞬間大きく踏み込み三刀を振るう

・・・狩り！！！」――ガシユツ！！！！

背面におれの渾身の斬撃を受け、コタツが宙を舞う。そのときちょうどルフィの頭がゴムの弾性で凄まじい勢いで戻ってくる

・・・・・・鐘っ！！！！」――ガゴォン！！！！

ルフィの拘束から開放された細身の男は、だらりと力が抜け宙を舞っていたコタツと共に地面に倒れる驚いたことに2人とも息があるようだ

コタツに入ったネコを狩るには”虎狩”は過ぎた技だと思ったんだが頑丈なヤツみてエだな。

さて、タクミはどうなったんだ？

海岸の方を見ると傷つき倒れるクロネコ海賊団の船員と長い爪を生やしたタクミがいた

クロのヤツはどこに行きやがったんだ？

みると船員たちの傷はつぎつぎに増えていつてるようだ

眼を凝らして視てみると時折つつすらと影が見える気がする。

隣ではルフィが肩を震わせてその光景を見つめていた

「お前は仲間を何だと思ってるんだア！！！！！！」

普段耳にすることのないタクミの叫び声を聞いておれはその場の光景を理解した

S i d e ナミ

もと船長のクロの登場に1番脅えているのは船員たちのようなだった。クロはいつの間にか2人の部下の後ろに立っていて片手に5本の刃のついた手袋を突きつけてこう告げる

「・・・おいお前ら、・・・5分やろう、その餓鬼どもを消せ！
！それが出来ないのならお前ら皆殺しだ・・・その銀髪はおれがやる」

その様子を興味深そうに見つめていたタクミはわたし達に話しかける

「ナミ、ウソップ、・・・あの武器からはまだ新しい血の臭いが漂ってる。そのクロがここに来たってことは屋敷ではもう事が起こっ

てるかもしれない。お嬢様はきつとヤツを止める為にここに来る、たぶんウソップん所のお野菜三人組もな。あいつらにこの光景をみせるのは酷だ。もしやってきたら坂の上で食い止めてくれないか？何にも心配するなっっていつてやれ」

タクミはわたし達に笑いかける。タクミが眼を閉じて集中すると獣特有の鋭い爪の4本がメキメキと音を立て30cm程伸びていく。クロと目を合わせた後、わたし達を巻き込まないため海岸のほうへと走っていった。わたしはタクミの願いをウソップにまかせクロネコ海賊団の船へ向かう

こんだけ面倒な思いしてただ働きじゃ割に合わないわよ。

睨み合うルフィ達の横を通り抜けた先ではタクミとクロが爪と刃を交えて笑いあっていた

・・・

クロネコ海賊団の船には質の悪い宝と少しばかりの現金があっただけで簡単にまとめられた

麻袋を抱えて甲板に上がると傷つき呻いているクロネコ海賊団の船員達の中でタクミが叫び声を上げていた

「お前は仲間を何だと思ってるんだア！！！！！！」

タクミ・・・！！？

Side
Out

本戦開幕（後書き）

戦闘描写が難しすぎる。

もっと心理描写が書きたい。それもシリアスじゃないヤツ

とばすわけにも行かないし・・・

感想・評価お待ちしております。

終幕〜finale〜（前書き）

作者は重度のラルヲタです。

終幕 ｝ f i n a l e ｝

クロを警戒しながら俺は海岸へと駆けていく。俺の意図はわかっているだろうがクロは俺についてきて、かつての船員に囲まれるかたちで俺と向き合う

「珍妙なりだな。悪魔の実なんぞ喰いたくないとおもわされる」

そういえば東の海で動物系ソオンの能力者は見なかったな。

「そうだなこの実が持つ凶暴性にあてられて今にもお前を喰い殺してしまいそうだ」

「やれるものならやってみろ!!!!」 - - - キーンッ!!!!

すばやい初撃にくらいつき、「爪鉄塊そう」で受け止める。

俺は戦闘時「鉄塊」を身体の約5%以上にかけると動けなくなる。本来は50%程までいけるのだが、「生命帰還」による半自動制御の「獅子 鉄塊」に精神力を裂くとこれが限界。「爪 鉄塊」は爪を強化する性質上指にまで「鉄塊」をかけてなくてはならない。

刃物を使う相手との戦闘を考慮して修行したのだが普通に武器をもったほうが精神的に楽だったかもしれない。でも動物系が武器を使うのが邪道な気がしてやめた。

「獅子 鉄塊」の反応速度も自動制御のままではクロの速度に到底及ばないようだ。俺の無意識下での防衛本能によって動いて守る万能の鎧になる予定だったんだがまだ俺の意思で動かす際の初動を速めている程度の成果しかあがっていない。修行が必要だな！

俺はまだまだ上を目指せる。そう考えてクロをみるとクロは笑っていた。こいつ一般人になるなんてどっち道無理だったんじゃないかと思う。完全に戦闘狂の眼をしている。

腕力にまかせてクロの刃を振り払うとすぐさまクロが動く”抜き足” 対俺の「剃」は完全に互角。平面の戦いでは埒が明かない、「剃刀」で立体の動きをしクロのを翻弄する。

俺の攻撃を背に受けてクロは不適に笑う。殺そうと思えば首を取れたが今回は捕縛が目的、殺すわけにはいかない

「もういい。お前の速さはわかった。だがお前はまだ本物の海賊の恐ろしさを知らない。みせてやろう速さのその先を……！」

クロは脱力し腕をゆらゆらと動かす。クロネコ海賊団の船員は慌ててその場を離れようとするものや命乞いをするものなど様々だ

”杓死” かいまさらそんな技で何が出来るといいうんだ？お前の速さがわかったのはこっちも一緒だって言うのに。

「”杓死”！！！！」

「は？」

・・・いやまで、速い！！速すぎる！！何だこれは想定外だ！

”杓死” って技は周りで被害を受けてる船員が叫んでいるように”抜き足”での無差別攻撃じゃなかったのか？

・・・そうかそういうことか”抜き足”速さに目がついていつてないこいつらは”杓死”速さが理解できてなかったんだ。

駄目だ目では終えても追いかけて捕らえることはできない。精々迎え撃つただけだが意識下制御で広範囲に広げている俺の「獅子 鉄塊」を警戒してか近づいてこない・・・？

・・・！！？俺は原作で語られなかった真実にたどり着いてしまった。クロは”杓死”を完全に制御しきっている。おそらく関係ない部分をわざと攻撃しそこに注意が向いたところをしとめようとしているのだろう。ためしに右腕に隙を作り「鉄塊」をかけているとそこを攻撃し、浅く打って離脱した。なるほど隙の少ない相手にはヒット&アウェイでダメージの蓄積を狙っているんだ。一撃でしとめられる隙を相手が見せるそのときまで

その為にこいつは仲間を無慈悲に切り続ける。

・・・ふっ！見つけた勝利への一本道！！決定的な隙を部分的に作る不自然さの無い行動！！！圧倒的有利を確信した相手を地獄へと誘う！！！！悪魔の咆哮！！！！！！

原作キャラの台詞を奪うつもりは無かったのだが、天を仰ぎ叫んだ。

「お前は仲間を何だと思ってるんだア！！！！！！」

S i d e クロ

腕に鉄板でも仕込んでいるのか？

唯一見えた隙をついた攻撃は金属音が響いただけに終わり再び適当な場所を切りつけながらヤツの周りを旋回する。本当に隙が無い、ヤツの鬣の力の正体が解れば対処のしようもあるが、おまけに服の下には鉄板を仕込んでいるようだ。

だが僅か数秒後、おれの顔には三日月の笑みが張り付いた

勝機！！！！

銀髪が天に向かって生温い戯言をはいた瞬間、おれはヤツの咽喉を目掛けて”猫の手”を薙いだ!!!

- - - ギイン!!!!

!!!?・・・なあっ???

ヤツは明らかに生身の咽喉でおれの”猫の手”を受け止めた!!あ
りえん悪魔の実の力か!?

- - - ドシュ!!!!

「っがはあ!!!!!!」

両肩と両膝に鋭い痛みを感じ身体を見ると四本の極太の針がおれの
身体を貫いていた。

おれの血に濡れて、怪しく輝くその針は間違いなくヤツの鬣だった。

S i d e O u t

「獅子 針銃^{しんがん}」

四肢の重要関節を貫かれ、地に横たわるクロに自分を倒した技の名前を教えてやった。技名は繰り出すときに告げるのがお約束なのはわかってるけど速度で上回るクロにそんな事やってたら逃げられるのでしかたない

俺に向けられる多くの視線を心地よく浴びながら告げる。

「終わったぞ、みんな!!!」

一味からは歓声、クロネコ海賊団からは畏怖のこもったやはり歓声

こうして舞台は終幕を迎えた

終幕 } f i n a l e } (後書き)

戦闘描写は本当に疲れました。

主人公は力の使い方に無駄が多いです。いつか原作組に抜かれると思います。が戦闘には参加させ続ける予定です。

感想評価お待ちしております。

カーテンコールのその後で（前書き）

ナミに心の平穏が訪れます。

きっとナミはこんな反応しないと思いますけど。

カーテンコールのその後で

クロ、ブチ、シャムを縛り上げる為のロープが欲しくてクロネコ海賊団にはなしかけると名前を聞かれた。

「俺はアイザワ・タクミ。ハンターだ」

「やっぱ聞かねえ名だな・・・アンタ何者なんだ？」

「だから言ってるだろ？ハンターだって・・・それと覚えておくといい俺は未来の海賊王の船員だ！！！」

「・・・！！？」

コイツ頭おかしいんじゃないの??? って感じの眼で見られたので言っただけ

「モンキー・D・ルフィ！！俺が海賊王にする男の名前だ！！近いうちに必ずその名を聞くはずだ！！！」

これでルフィの中の俺評価は上がるかな？飯以外あまり接点が無い

からたまには殊勝なことを言っておいたほうがいいだろう。サンジが加入したら俺の貢献度下がるし。

ロープを受け取り「お前らは帰っていい」と伝えたと驚きながらも傷ついた船員達を船に運び始める。クロと違い、ニヤーバン・兄弟の事は返して欲しそだったが人獣形態になると悔しそうに引き下がった。コイツら意外と慕われてんだなと思いながらもきつくロープで縛る。

クロの”猫の手”はコイツがクロである動かぬ証拠として提出するつもりだ。ゾロが何故か物欲しそうな眼でこちらを見ていたがスル！。

カヤお嬢様たつての希望でクロと対面させ、ウソップはカヤを送っていた。

クロネコ海賊団の船も出航しようやく海岸は静かになったのでナミにあの計画を打ち明けることにした。

Side ナミ

タクミは普通にアーロンに勝てるんじゃないかと思う。なんか頼んだらあっさり引き受けてくれそうだし。

・・・ダメダメダメッ！！！！そんな危険を冒さなくてももう少しでアーロンから村を買う為の一億ベリーが貯まるんだから！！

でもそのときはみんなを裏切らなくちゃいけない・・・こんなに辛い裏切りは初めてだ・・・

気持ちを落ち着かせてから、縛った3人の横に座るタクミの元に向かうと思ってもよらない提案を受けた

「俺はまだ海賊として政府に追われてない身だからさ、昨日、賞金稼ぎだつて身分を偽って海軍にクロのことを密告したんだ。手配書は失効してるけど、ここまで引き取りに来てくれる上に、懸賞金は即金で払ってくれてそのまま次の目的地に連れて行ってくれるってさ」

わたしの心は躍った！もしかしたらこれで一億ベリーが貯まるかもしれない今回の収穫と合わせてあと七百万ベリーで足りるはずだ！！

「そつそれで！！？」

「本当ならそのまま海軍船に引っ張っていつてもらつてらくらく航海といきたいところなんだけどルフィが居たらダメでしょ？あいつ嘘つけないし。」おれはルフィ海賊王になる男だ！！！」とかいかなないし。だからナミは二人を連れて次の目的地に先行しうて欲しいんだよ。ダメかな？」

肝心の金額を早く知りたいのだけれどあまりがつがつしたところを見せたくない・・・何考えてるんだろわたし、そのお金を持ち逃げしたときがタクミと別れる時だというのに・・・

「いいけど次の目的地って何処？」

「海上レストラン・バラティエって所！！！俺の腕じゃ味付け一緒に飽きてきたし、栄養に偏りがあると思うから、本職のコックを誘いたいんだ」

確かにタクミの作る料理はおいしいのだが・・・何というか豪快過ぎる感じがたまにする。何より食材の調達から調理までを一手に引き受けるのは負担が大きいだろう。わたしも後片付けくらいは手伝ってるけど。

「なるほどね。ちなみにあいつらの懸賞金っていくら貰えるの？そんな条件じゃ満額じゃないんでしょう？」

自然な感じで聞けたかしら・・・あきらかに不自然だったかもしれないわね。

「流石ナミ！！察がいいね！！結構がんばって交渉したんだけど一千万ベリーしか取れなかったよ」

やった！！！！これでココヤシ村を救える！！！！みんな笑えるんだ！！！！

「タクミはそういう交渉得意そうね・・・まあわたしならもとの懸賞金のさらに上を狙えてたと思うけどね」

軽口をいって内心の歓喜をごまかす

「結構がんばったつもりんだけど・・・まあいいか。で、この金は一味の金だからナミに預けるから自由にしてよ」

????????????????ん？意味が解らないわ。

「・・・・はあ？どういう意味よ自由にしていって」

「そのまんまの意味だよ。そのお金をナミがどうしようが構わないって事・・・お金・・・たくさん必要なんだろ？」

！！！？えっ！！何を言ってるの？タクミのこの言い方は・・・

「！！！？・・・・タクミ・・・・何を知ってるの？」

「俺は占いも出来るっていったでしょ？ってことで見逃してくれないかな。．．．ナミを助けたいだけなんだ．．．お金を受け取ってくれるならさ、ルフィにこのことを旨く伝えてから言っただけだよ．．．」わたしを一味に入れなさい”って」

本当の理由は言ってくれないけど、タクミは全部知ってたんだ．．．わたしの為に．．．ここまでのことをしてくれた．．．これからみんなと一緒にいられる．．．ココヤシ村は救われるんだ．．．そう思うと自然と涙が溢れてきた。

「．．．なつ何それ．．．わたしの．．．っ真似のつもり？．．．っ似てないわよっ！．．．」

こんなことを言いたいんじゃない．．．涙はなんとかおさまった．．．ちゃんと気持ちを伝えなきゃ！！

「．．．でも！！．．．ルフィにちゃんと言っわ」

「そっか」

タクミは優しく微笑んでくれた．．．わたしも自然に笑顔がこぼれる

「それからタクミにも……ありがとう」

その時、最近のわたしは心からわらえていることに気づいて、また
ちよつと泣いた。

S i d e O u t

カーテンコールのその後で（後書き）

やりすぎましたね。

感想・評価お待ちしております。

どたばた出航劇（前書き）

感想って結構な数が残るんですね、ほかの方の作品の感想欄を見て始めて知りました。何か悪口が次々と入ってくるのでうれしい感想がすぐ消えてしまうと思って、問題が解決した感想とかを早めに消してたんです。

それが原因で「消された！！もうこの作者には感想は書かない」となってる人が居ないかと心配です。これからは只の悪口以外は消さないようにしますのでお気軽に感想をお書き下さい。かならず返信はします。

こういうことはあとがきに書くべきなのでしょうが、前書きのほうが目にとまると思いこちらに書き込みました。

そつえば先程アクセス解析を確認したら20万PV・ユニーク16000になってました。読んでくださる皆さんに感謝です。

どたばた出航劇

S i d e
ルフィ

悪執事たちを倒してからおれとゾロは飯屋にいった。みんなで来ようと思ってたけどナミは宝の整理をしてるし、ウソップはお嬢様を送りに行っちゃった。タクミにまで用事があるから先に行つてると言われて、おれは結局ゾロと二人でここにきたんだ。

ナミが遅れてきた時にもタクミは一緒じゃなかった。てつきり二人で来ると思つてたからナミに聞いてみたんだけどタクミは海岸で一人バーベキューって寂しーい事をやるから飯はいらねエらしい。しかもこの島の生物調査を丸一日かけてやるらしくて今日は帰つてこねエんだと。

その後はナミが一味に入れるとか今更なことを言つてきて「おれ達とつくに仲間だろ」とこたえたり、のどに引つかかった魚の骨をとつてたらナミにあきれられたりしたけど、とりあえず飯は食つたから食料の買い込みでもして、舟に戻ることにした。

そしたら店のドアが開いて知つてる顔があつたから声をかけといた。

「よう！！お嬢様っ」

「ここにいらしたんですね」

どうやらおれ達を探していたみてエだ。

「どうした！船くれるのか？」

「えっ・・・ええ。船、必要なですよね」

「やつほーーーーーイ！！！！！」

お嬢様いいヤツじゃねエか！！！！

「・・・・・・・・北の海岸に明日用意しておきます。航海に必要な物も積んでおきますよ」

「飯もか！？」

「・・・・はい。食料も積んでおきます」

「ありがとう！ふんだりけったりだな！！！」

「至れり尽くせりだ、どあほ」

”ど”は付けるなよ!!!」

心外だ!!!失礼なヤツめ!!

.....

「.....行きましょうか」

「.....はっ、はい、よろしいんですか？」

「いいのよ、いつもこんな感じだから・・・それよりお酒だけは追加しておきたいんだけど、何処で買うのがおススメかしら？うちのクルーがこの村で買った「オロロソ・シェリー」が気に入ったみたいで樽で10個くらい欲しいんだけど」

「.....樽ではないと思います」

S i d e
ゾロ

ルフィの文句につき合わされていたらナミに置いていかれたみてエだ。あいつは人をどっか置いていくのが趣味なのかもしれねエ。とりあえず店を出るか。

それにしてもクロの武器はちょっと欲しかったな。

Side ナミ

タクミと別れてルフィたちと合流したら、タクミはどうしたのかと聞かれたから冗談のつもりで「タクミは一人バーベキューするらしいわよ」と言ったら信じてしまったので本当の事を言うタイミングを失ってしまった。とりあえず急場しのぎにタクミが明日の出航まで戻らないと言っておいた。

でもこれだけは、今・・・今いっておかなくちゃ!!!

「ルフィ！単刀直入に言うわ！！」わたしを一味に入れなさい！！！！」

言った！！言っただけだわ何か”わたしの真似をするタクミ”を真似してしまっただけだかしら？

「何言つてんだ？おれ達とづくに仲間だろ」

へっ？？勝手に仲間に昇格済み？・・・わたしバカだなあ・・・手を組むだけって言ったってルフィは聞いちゃいなかったんだ。わたしはとづくにこの船の仲間だったんだ。

その後はいつもみたいに馬鹿な話をしてわたしはゾロとお酒を飲んで、もう店を出ようって時に屋敷のお嬢様がやってきた。

お嬢様はわたしたちに船をくれるらしい、どんな船かしら？楽しみだわ♪

ルフィが騒いでいたので置いていくことにした。ゾロがいれば大丈夫でしょうし。

わたしはタクミが樽で10個欲しいと言ってたお酒を思い出してどこで買えばいいか聞いてみたんだけど、ボトルでしか置いてないみたいね。まあ足りないときは海上レストランで追加すればいいわね。

翌日の出航時、前日にお酒を飲みながら話を通していたゾロと二人がかりで説得してるんだけど、タクミをこの島に置いてく事にルフィが猛反発している。

ダメだ・・・ルフィは納得しそうにない。

本当どうしようかしら。あら？あれはタクミ？手招きしてるけど何かしら？

Side ウソップ

「ぎゃあああああああああああああ」

今おれは坂道を転げ落ちている、昨日ウソップ海賊団の涙と感動の解散式を終え、海へ出る為に荷造りをするにしたらただ荷物が全部入りそうな入れ物がなかったから、村の雑貨屋で誰が使った？って感じの特大リュックを購入して海岸に小船の用意をしに行ったらタクミがいた。何でもおれが嘘にするって言った今回の事件がばれないように後処理をしてくれていたらしい。

お礼を言ってから一緒にバーベキューをして家に帰った。一晩中かかってリュックに荷物を詰めてる途中でタクミがきておれのベットで勝手に寝てから夜明け前に行行った。

家から出るときに特大リュックがつつかえて家が半壊したが何とかここまで来た。

「止めてくれーーーーーっ!!」

そして転がってる。海岸にはルフィ達もきているが言い争いをしてるみたいで誰も気づいてくれない。カヤは気づいてくれてるみてエ

だけど、あわあわ言ってるだけで助けてくれそうにもない。船に激突するのかと思ったけど何故かジャンプ台みたいなものが設置されていておれはそのまま羊の船首が着いた船に乗った。

S i d e ルフィ

出航の時になつてもタクミもウソップも来ねエ！！ウソップは多分もうすぐ来るってお嬢様が言つてたから別にいいけどタクミはこの島で何日間か生物調査をしてからおれ達を追いかけてくるって言つたらしい。

それだけなら納得したけどその間にレストランでコックを探しとけ何て言つてたのを聞いたら我慢できなかった！！タクミは飯作るのが嫌になつたからこの船をおりるつもりなんだ。そうに決まつてる！絶対に乗せていくんだと譲らないでいると、ナミは呆れてどつかいっちまった。ゾロと言い合いを続けてたら何かが飛んでつてメリー号に乗った。あれ？よく見たらウソップじゃねえか！！

「ウソップ！！遅かったじゃねえか！！！」

ウソップに声をかけて船に跳び乗ったんだけどウソップはお嬢様と話があるみたいで直ぐにいっちまったから説得を繰り返すゾロとまた言い合いになった。

「ゾロ!!もう大丈夫よ」

「そうか、おれは後の事は知らねエぞ」

ゾロが船室に入っていつちまったから回りを見た

「・・・何で周りは海ばっかなんだ？」

S i d e
O u t

どたばた出航劇（後書き）

難産の割りに面白くなかったです。

だめだ、こんなルフィを書くつもりじゃなかったのに、自分で書いてて謎です。

ルフィ書いてる時たいてい眠たい時なんですけど、気づけばネタ線張ってる作者がいます。逆スクロールしてまで張りに戻ってます。

もうこのままルフィはネタキャラ化すると思います。そのほうがまだ面白いキャラにできると思うので、ウソップと主人公の三人でトリオ漫才でもさせますね。

感想・評価お待ちしております。

舞台裏（前書き）

本当におもしろくありません。

22話の舞台裏です。書かなくても伝わるかなと思ってはいるんですけど一応書きました。

舞台裏

「はあゝ．．．．」

ようやくルフィを送り出すことに成功した．．．．本当に疲れた。そりゃあ溜め息もでる。ルフィはなんであんなにこねてたんだ？俺がいない間の飯の心配だろうか？

食材は大量に積んだみたいだし、ナミがおいしい家庭料理を作ってくれるはずだから問題無いと思うんだけど．．．．ああ、有料らしいからそのせいかな。

昨日ナミと別れた俺は、すっかり忘れていたクロたちの治療を行い洞窟に放り込んでおいた。ブチは結構危ない状態だったが持ち前のタフネスで乗り切るだろう。生かして引き渡せっていわれたのはク口だけだし。

その後は俺が暴れたせいで嘘にすることがより困難になった海岸の戦場跡を修復（血が付いた土を掘り返して埋めたりとか）。原作でこの役目を担った誰かがいるだろうから、そのうち手伝いが来るんだろうと思っていた。

結果終わって昼飯のバーベキューを用意してる時にウソップが来た。取り掛かるタイミングが早かったみたいだな。ウソップはあの特大

リュックサックを買った後、小舟をここまで陸送で運んできたらしいから腹も減ってるだろうと思ってバーベキューに誘い、一緒に食事した。ウソップは俺にいじり倒された後に海岸のお礼を言っただけで帰っていった。

ウソップが帰ってから島は島の生物調査を試みたんだけど殆どが家畜かペットで小動物しかいなかった。「剃刀」使って結構見て回ったけどこの日の新生物発見は16種類、そのうち珍獣島からの記録しかないからこの世界では新生物という定義に入る元の世界にもいたものが14種類、結果厳密には2種類しか発見できなかった。

高速回転する毒針ヤマアラシはちょっと食べれそうにもなかったから身体データを取りスケッチをして開放の後追跡、巣を特定してみると繁殖のシステムが卵だったのには驚いた。育児をしている固体が発見できず、回転している小さな子供を発見したので哺乳類では無いようだ。

草原をアグレッシブに駆け回るコアラの群れはハーレムの形態を取っているようだがはぐれのオスの数がかなり多く調査対象のハーレムのボスは調査中の1時間の間にボス交代の決闘を3回も申し込まれていた。食べてみた結果はウソップ宅のトイレに駆け込むという残念な結果だ。数時間ベットで仮眠を取り調査再開。

新しい発見も無くそろそろ出航の時間だろうとメリー号が停泊しているはずの北の海岸に向かうと船の説明は終わっているようだがなにやらもめていたのでナミを手招きして事情を聞くとルフィが納得していないらしいこうなれば強引に出航させてしまおうとナミに策を授けて俺はブチが割った岩盤でウソップ発射台を作り上げる。飛んでいったウソップを「剃刀」で起動補正し船に乗せる。今の行動は誰にも見られていないはずだ。気分はト○・クルーズ!!

ウソップを追い船に乗ったルフィに間を置かず説得を続けるように
お願いしてゾロ投入。

出航準備を整えていたナミによってルフィが気づかぬ間にメリー号
は沖へ消えていった。

ミッション・コンプリート!!

まあこれだけ動き回れば疲れも貯まるって事で今日は半壊してるは
ずのウソップ邸で昼寝でもしよう。

あしたはネズミが来るしね。

舞台裏（後書き）

主人公のハンターとしての姿だけが今回本当に書きたかったところなんですけど淡々とした文でそこだけ生き生きとした主人公書くのも変かなあと想着てそこも淡々と書いてちゃったんで過去最悪におもしろくないですね。

消そうかなとも思ってたんですけど不眠で書いたのでなんかもったいなくなりました。

次回からがんばります。

ネズミ大佐（前書き）

大佐は意外と優秀です。

ネズミ大佐

S i d e ネズミ

「チチチチチチチチチチ」

今日はあの”百計のクロ”が手に入る日だ！！笑いが止まらない。

少し悩んだがクロは自分で捕まえた事にして出世の手柄にしよう。
これでおれの准将昇進は確実だ。

あの賞金稼ぎ、部下の報告ではタクミとかいってたな。あいつは世渡りつてもんを解ってる。強すぎる賞金稼ぎは政府に目を付けられる。やってることは海賊と変わらんヤツ等が多いからな。下手を打って自らが賞金首となってしまうことを防ぐ為におれに取り入ったんだろう。

”百計のクロ”を捕らえると自身を持つて言えるような賞金稼ぎはこの東の海にはまずいない。あの”海賊狩りのゾロ”なら可能かも知れんが魔獣のような男と言われるくらいだ、腕自慢の直情型と見てまず間違いは無いだろう。百計を出し抜くのは難しいだろうな。

その点あいつはかなりの策略家に違いない。あいつは初め出世に関

わる話だと言つて電話をかけてきている。つまりは最初からおれが自分の金で賞金を払い手柄を取りに来ると決め付けていたって事だ。その上で一千万ベリーをお買い得みたいな言い方をしやがった。あいつはおれの懐ぐあいをしっている。一千万ベリー、支部の大佐が簡単に動かせる金じゃないあいつはおれとアーロンの繋がりに気づいてるんだ。

出世欲のあるヤツはたくさんいる中交渉相手にわざわざおれを選んだのは、おおかた金で動く人間なら信用できるってところだろうな。おれも同じ意見だ、いいパートナーが見つかったぜ。

Side Out

昨日はよく寝たなあ。昼寝のつもりが夜まで寝てしまったけど、お気に入りのシェリーを飲みまくってたら気がついたら朝だったしな。

この島最後の生物調査は完全に空振りだ。途中で羽が生えたトカゲを見つけて超小型のドラゴンかと心躍ったのだがよく見ると蝙蝠の羽を薄皮に縫い付けてあるだけだった。あの技術力からするとウソツプの仕業だろう。

ウソツプ海賊団の面々で追いかけるドラゴンが現実味に乏しいからトカゲをデコレートしたんだろうけど、ほんとう・・・ひどいことするな。

その後も収獲は無くネズミとの約束に遅れないように早めに南の海岸へクロたちを運んで行き、そこで酒盛りをしながら待つことにした。

S i d e ネズミ

時間より遅れて約束の海岸に接岸する。ここに来る前に北の海岸を見てきたのだがやはり間違いなかった戦闘はおそらくあの場所で極最近に行われている。

わざわざ南の海岸と指定してきた時に疑問に思ったものだ近くのほかの海岸で戦闘を行うつもりではないかと、あの海岸には土を返したばかりの場所がいくつもあったさらには埋めてはいるが隠しようがなかった円を描くように残った斬撃の跡、クロはおそらく噂に聞く”杓死”を使ったのだろう。そしてそれを打ち破った。それほどの男だ自分が賞金首になるのを防ぐ為に破格の対価をおれに渡すのもうなずける。

船から降りて、その男の姿を見て戦慄した！！その身体に、顔にただ一つの傷すら無い！！！！

戦闘が行われたのはおそらく電話があった3日前以降、傷が癒える時間は無い。この男は海軍の一線を相手どり全滅させるような男を無傷で倒したってのか！！！！

「チチチチ・・・君がタクミくんかね？おれが海軍第16支部大佐のネズミだ」

おれは努めて冷静にいった交渉ごとでは相手に弱みを見せてはいけない。必ずこの男はおれの下につけてみせる。

「お初にお目にかかります大佐殿、専属賞金稼ぎをさせていただくアイザワ・タクミと申します」

言葉は丁寧だがこの男のそれは相手に意図的に威圧感を与えてやる。やっかいな相手だが実力があるなら問題ないだろう。

「そうかね。では早速”百計のクロ”を見せてくれたまえ」

「ここに・・・グアラン！！！！」

タクミが横に並べてある大きな樽の一つを蹴り倒すとそこにはロープで縛られたクロが呻き声をあげていた

「これがクロが使っていた武器、通称”猫の手”です。検めてください」

本物だ！！！！コイツは”百計のクロ”手配書どつりの顔にこの武器
！！！！間違いようが無い。

「結構！！！！残りの樽は幹部のシャムとブチだな？」

「その通りです。こちらにも捕縛に成功しておりますが、検められ
ますか？」

「いや、構わんよ。お前らさっさとコイツらを船底に放り込め！！
！！・・・さあ君も乗りたまえ海上レストランへ案内しようじゃない
か」

「それではお言葉に甘えて」

タクミは海軍船にジャンプして乗り込んだ

この男本物だ一流の賞金稼ぎだ！！！！こんなヤツが俺の配下につけ
ばおれの出世は約束されたも同然だ！！

おれは船に乗り込み出航の指示をだした。

ネズミ大佐（後書き）

なんか大佐クールになりすぎましたね。

なんかここ何話か書くの疲れたんですけどさっさと気楽にかけました。

次回は先行したナミたちを楽しく書きたいと思います。

感想・評価おまちしています。

こちらゴーイング・メリー号甲板大砲前ウソップ（前書き）

作者試行錯誤の最中です。ロビンとくつつけるにしても、このままナミも一緒にとの意見が結構来てます。

期待に応えようかなと思い始めたのですがどうでしょうか？

ロビンは絶対なんですけど今のところ「ハーレム及びナミ推し派」6対「ロビン派」1（作者）なんですよね。「ロビン派」はほっといても作者のロビンルートを信じているのだと思います。

作者的にその分岐点はまだまだ先なのでそれまで意見を聞こうと思います。

こちらゴーイング・メリー号甲板大砲前ウソップ

Side
ウソップ

「あーあー・・・こちらウソップ、こちらウソップ!! ルフィ、聞こえますかどおぞー!!・・・?」

—
—
—
—
ドゥン！！

「ん！？・・・お前何やってんだ、突然！！」

「大砲の練習だよ。でもうまく飛ばねエもんだな」

「……ってオイ！！何この距離で道草食ってんの！？船の端から端まで集中力もたねエのか！！」

「おっ！！ウソップもやってみねエか？」

「やってみねエか？じゃねエエエ！お前が船内無線が欲しいって

いつから、糸電話作ってやったんだろうが！！糸だるんだるんだぞ
??だるんだるん！！！！」

「そんなもん無くても声きこえてるじゃねエか???それよりお前
やってみろよ！！」

「…………一発じゃあ！！いっばつで当てたるわア！！…………あ
の岩か…………っココだア！！」

…………ドゴオン！！

「すげー…………当たった、一発で！！！！」

「んナ！？言っただろう？おれを讃えるならキャプテンと呼んでい
いぜ！！」

「お前は”ツツこみ”だってタクミが言ってたぞ？」

「…………あ・の・野・郎…………合流したら精神的攻撃だ！！
！もうむし！！ムシムシ！！」
スピリチュアルアタック

「はっはっはっは！！！！やっぱお前おもしれエなア！！そう言って

からかつてみたらって言われたただだよ。お前はさ、”狙撃手”に決まりだな！」

「まア”ツツこみ”よりは、ましだなひとまず”狙撃手”に甘んじ
といてやるが、おれの渾身の力作”糸電話EX”を無駄にすんじゃ
ねエ、遊ぶぞー!!」

「だってそれって、無線じゃねエじゃん」

……ルフィにまともにツツこまれちゃった。

S i d e
ゾロ

……ドゥーン!!

帆を書き終え、おれとナミが休憩を取っていると船に轟音が鳴り響
いた

「ん!?…お前何やってんだ、突然!!」

「大砲の練習だよ。でもうまく飛ばねエもんだな」

あいつにそんな事させてたら碌なことが起きねエから止めようかとも思ったけどウソップが行ったから任せよう。

それよりナミが少し心配だあの二人と要るときは楽しそうに笑ってるし別にそれが演技の様には見えねエ。けどおれと二人の時はあんまり喋らねエで何か考え事をしてる見てエだ。たぶんおれからほとんど話しかけねエからだと思うけど。

昨日の夜はタクミの為に買った酒を一人で飲んだ。まあ何となく理由がわかったけどおれにはどうしようもねエから黙って一緒に酒飲んだだけだ。

あんなにタクミを置いてきた事に憤慨していたルフィはウソップとわいわいやってる

こいつもあれぐらい気楽になれりゃあ楽だろうに。

まあ一人にしとくのもなんだし、暫くはここにいろか。

S i d e
ナミ

タクミを置いて出航した昨日はルフィがうるさかった。あまりにしつこいから「わたしの為にやってくれてることがあるのよ。・・・

今はわたしに勇気がなくて言えないから。もう少し待ってて」と言う
と、「そっか、タクミらしいな」と一言いって納得したみたいだ

ルフィは何かタクミのこと解ってるんだなと思った。話さなくても
解るんだろっ、男っていいなと思っいなながらタクミに買った「オロ
ロソ・シェリー」を一人で飲んでたらテーブルの向かいにゾロが座
った

ゾロは黙って一緒に飲み始めた。ゾロはわたしを心配してくれてる
んだ、それくらいはわたしにも解ったから。心の中でだけありがと
うと呟いてわたしはこち良い酔いを楽しんだ

ルフィデザイン、ウソップ主導製作で海賊旗と帆が完成してゾロと
わたしはメインマストの下で休憩してる。ゾロはやっぱ何も言わ
ないけど昼寝もしないでそこにいてくれる優しさが嬉しかった。

Side Out

こちらゴーイング・メリー号甲板大砲前ウソップ（後書き）

ぜんぜん進まなかった。ギャグノリでバラティエ到着させるはずだったのに原作1話にも相当しない進行具合。

長くしても良かったんですが、ナミ視点って終わらせやすいんですよ。なんとなく終わりにしたほうが綺麗に見える気がしました。

今回の話、別にナミを気の多い女にするつもりじゃないです。

感想・評価お待ちしております。

本当に怖い海上の医学（前書き）

壊血病怖いですね。

本当に怖い海上の医学

S i d e ジョニー

「・・・しつかりしろっ！！ヨサク！！・・・大丈夫だから・・・
きつとだいじょうぶだから・・・」

おれは賞金稼ぎのジョニー。おれと相棒は岩山の下で休んでいる。
いや、休まざるを得なかった。相棒のヨサクは、ほんの数日までピンピンしてやがったのに、突然青ざめて気絶をくり返し、昨日は口から血が滲み出して歯が抜け落ち、ついさっき古傷が開いた。

相棒は死ぬのか？いや、・・・そんなわけねエ！！何年も共にユニット組んでやってきたんだ！！大切な相棒なんだ！！ヨサクが死ぬわけねエ！！！！

・・・ドゥーン！！

「！！！？・・・何だア！！！！

突然の轟音に海を見渡すとふざけた船首を付けた船の大砲から煙が上がっていた。どうやらおれ達を狙って砲撃してきたようだ。あわ

てて錨をあげて舟を出す準備を始める

――ドゴォン!!

くっ!・・・っおい!!ヨサク!!大丈夫かヨサク!!」

差ほど間を置かずに放たれた2発目の砲弾が岩山に直撃し岩山は吹っ飛んだ。砕けた岩石がヨサクに降りかかるが、おれが必死に庇った甲斐あつてかヨサクは無事なようだ。紙一重だ。

この距離からの砲撃、2発でここまで合わせてきたって事はかなりの腕の砲撃手が乗っていると見て間違いねエ!!!早くこの場を離れねえと、ヤベエ!!

・・・・・・

・・・!?!?・・・いつまで経つても3発目を撃つてこねエ所をみるとあの海賊ども遊んでやがったんだ!!!赦せねエ!!!遊びでおれの相棒を殺す気か!!!

おれは怒りをあらわに今は静かな羊の船首の海賊船へとむかった

――バキバキッ!!

「出て来い海賊どもオーっ！！！！てめえら全員ブツ殺してやる！！」

手摺りを壊しながら船にあがり声の限りの叫びをあげる

「・・・・えっ！！？」

羊船のメインマストそこにはゾロのアニキが背中をあずけて座っていた

S i d e ヨサク

おれは賞金稼ぎのヨサク。いやー今回は本当に死ぬかと思った。記憶も曖昧だけど突然、貧血みてエになってそれからその繰り返し、口の中に血の味がしだして歯も抜けた、腹の傷が開いてからは何にも覚えてねエ。

気がついたら麦わら帽子を被った男がでかいジョッキでおれにライムジュースを飲ませていた。ライムジュースつつつかライム生絞りみてエなもんで正直しんどかったが「飲め、飲めば治る」と言われたから我慢した。

飲んだら貧血みたいな感じがちよつと良くなつた気がする。オレンジの姐さんの話を聴くに、要は栄養不足だつたらしい。相棒も心配してるみてエだし確りしなきゃならねエな！

「栄養全開、復活だーっ！！！」

「おお、やつたぜ相棒――！！！！」

「そんなに早く治るかっ！！！！」

・・・手厳しい姐さんの言う通りまだふらふらで口からは血が滲んでるタバコも血の味しかしやしねエが自己紹介をすませてお礼を言うておく。

「！！、ブヘエッ・・・・！！」

「ぬあっ！！！！？相棒オーーーー！！！！」

「いいから黙って休んでろ！！」

・・・やっぱまだ無理みてエだ。ゾロのアニキの言う通りにおとな

しく休んで話を聞くとゾロのアニキ達はあの海上レストランに向かつてる途中らしい。あそこは”鷹の目の男”が現れたって話もある場所だ！！こりゃあ、ゾロのアニキと”鷹の目の男”の頂上決戦が見られるかも知れねエ！！！！

ジョニーに”鷹の目の男”の話を聞いたアニキは武者震いを起こしてるみてエだし、おれ達はこの船と一緒に海上レストランに向かうことにした。

S i d e ルフィ

「着きやしたっ！！！！海上レストラン！！！！」

「ゾロの兄貴！！！！ルフィの兄貴！！！！ウソップの兄貴！！！！ナミの姐さん！！！！」

こいつらはヨサクとジョニー！！！！ウソップの村を出た次の日から一緒に付いて来てるおもしれエヤツらだ！！！！

「でっけー魚！！！！」

「ファンキーだな、おい！！！！」

レストランに夢中になってたらいつの間にか海軍の船が近づいてきて、ヨサクとジョニーは隠れやがった。

「見かけない海賊旗だな・・・おれは海軍本部大尉”鉄拳のフルボデイ”・・・船長はどいつだなのってみろ」

手に螺子みてエなのを付けた偉そうなヤツがおれ達に聞いてきた

「おれはルフィ海賊旗はおととい作ったばかりだ！」

「そうか、おれは今日は定休でね、駆け出しの弱小海賊をかまってる気は無いんだ。次に会ったら命はないと思え」

ムカつくことを言われて文句でも言ってるのかと思ったけどナミに止められたちまった。

「おい、やべエぞ！！あの野郎大砲でこっち狙ってやがる！！！」

「何イ！？」「」

みんなが騒ぎ出した。海軍の船の砲身は確かにこつちを向いてやがる

――ドゥンッ!!

「撃ちやがったア~~~~っ!!!!」

おれは素早く手摺りの上に立つ

「任せろっ!!!!ゴムゴムのっ・・・」

おれは大きく息を吸い込む

「おい、ルフィ!!何やってんだ!!!!?」

・・・風船っ!!!!」

――ドス!!

おれは膨らんだ腹で砲弾を受け止めそのまま

「返すぞ砲弾っ！！！」

……びょん！！……………ドゴーン！

「どこに返してんだバカッ！！！」

「……………何やってんの？」

……………タクミ！？

おれが砲弾を撃ち込んだしまったレストランの扉からは、タバコをくわえたタクミが出てきて、心底呆れた表情でこっちを見ていた。

S i d e O u t

本当に怖い海上の医学（後書き）

原作みたいに血を吐いたりはしないらしいです。

成人の場合、3ヶ月〜12ヶ月ビタミンCを摂取しないと作中のような症状が出るみたいですね。作者はこれ調べたあとビタミン剤飲みましたよ。

次回はようやくタクミを書きます。

感想・評価おまちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3875ba/>

百獣の王

2012年1月13日22時48分発行